



カエ!!ウチ

或る
女格闘家の
悲劇

しまだ たいじ
島田 泰二

本編セリフ青

島田兄弟の次男、ツンツン頭の赤パンツ(ややこしい)。練習生として、ジムに通うも試合ではまったく勝てない。

スパーでは榎村にボコられ良いところがない。

しまだ こうぞう
島田 浩三

本編セリフ緑

島田兄弟の三男、ボウズ頭の青パンツ。

ジムでの扱いは兄の泰二とほぼ同じ。

あいつらはフィジークを目指しているのかと周囲は思っている。

長男に誠一がいるがそれはまた別の話。

まきむら りな
榎村 梨奈

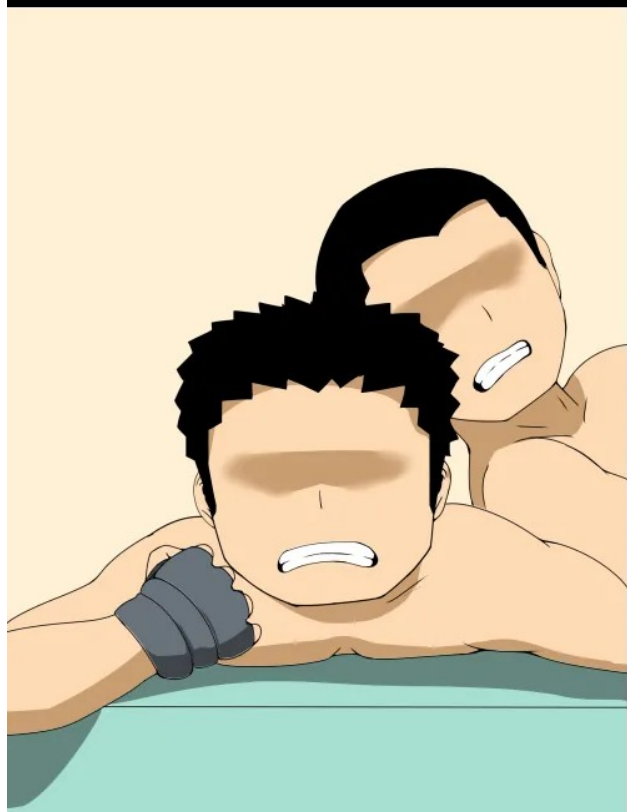
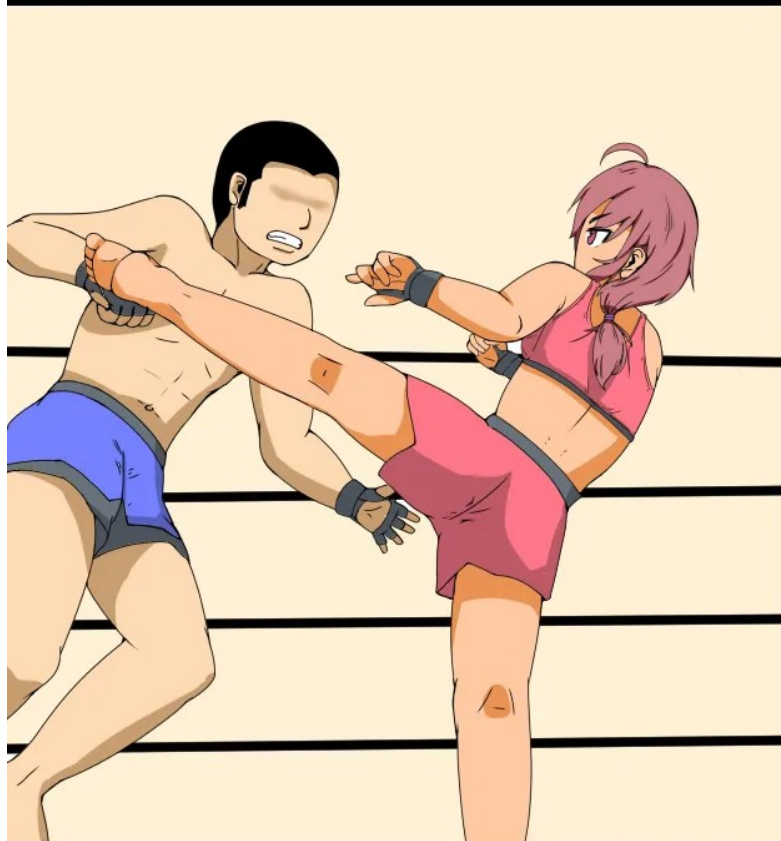
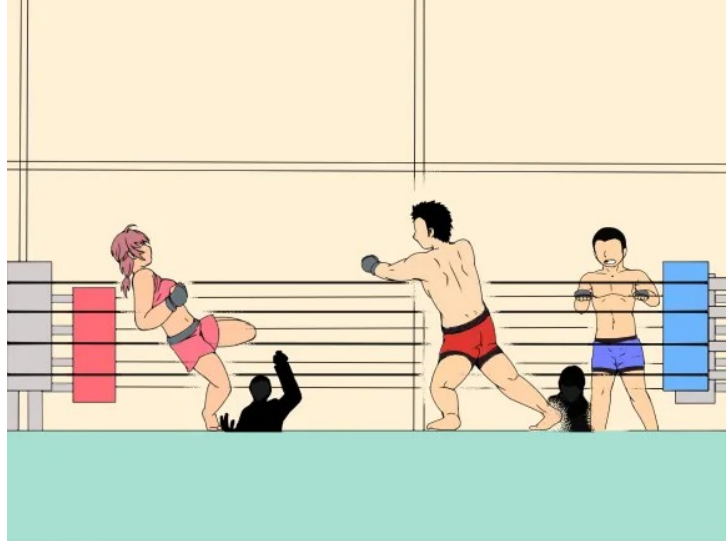
本編セリフ赤

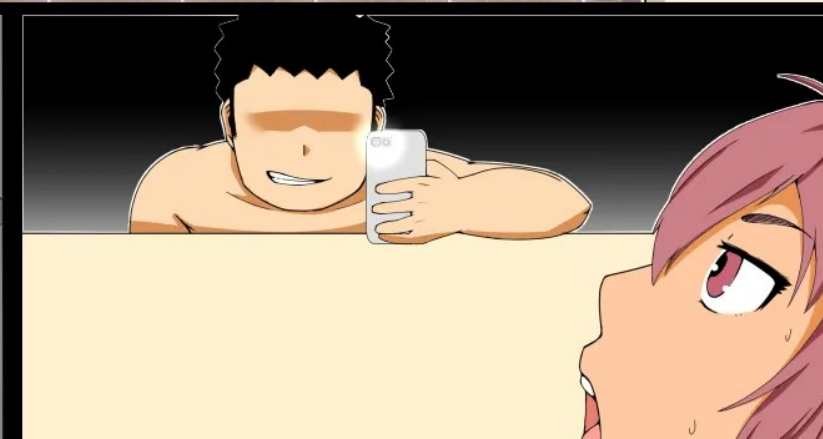
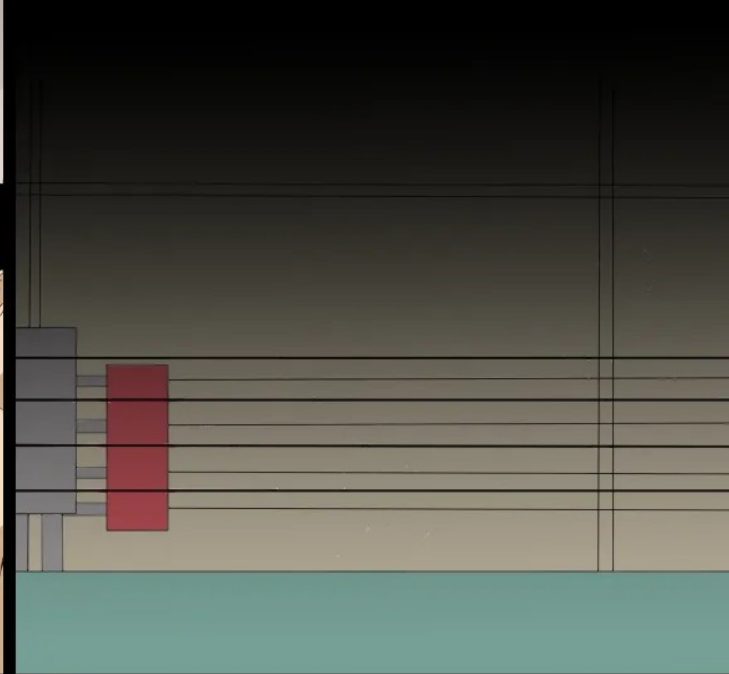
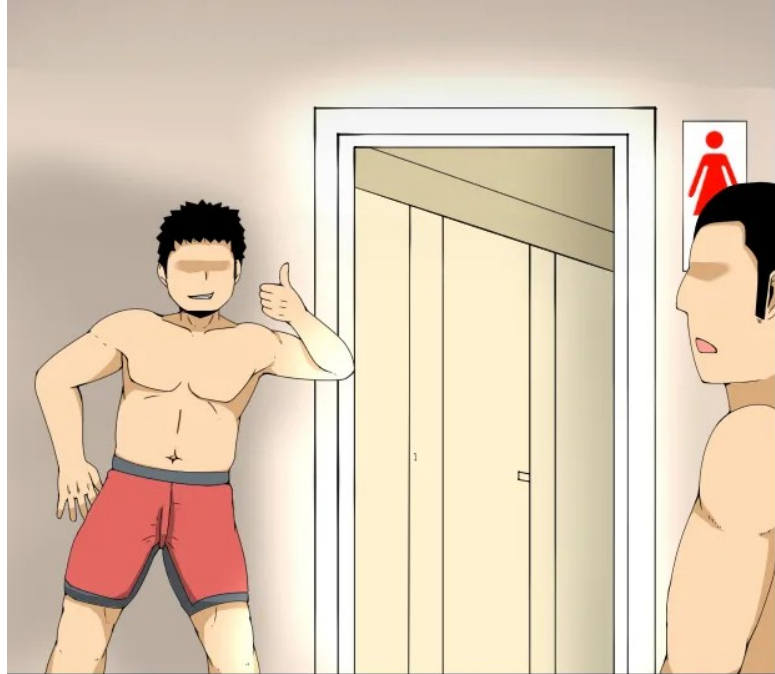
格闘技ジム「Legion」所属の格闘家、19歳。

一応期待されている女性格闘家のホープ

基本的に男嫌いで、いつも島田兄弟をスパーでボコって溜飲を下げている。



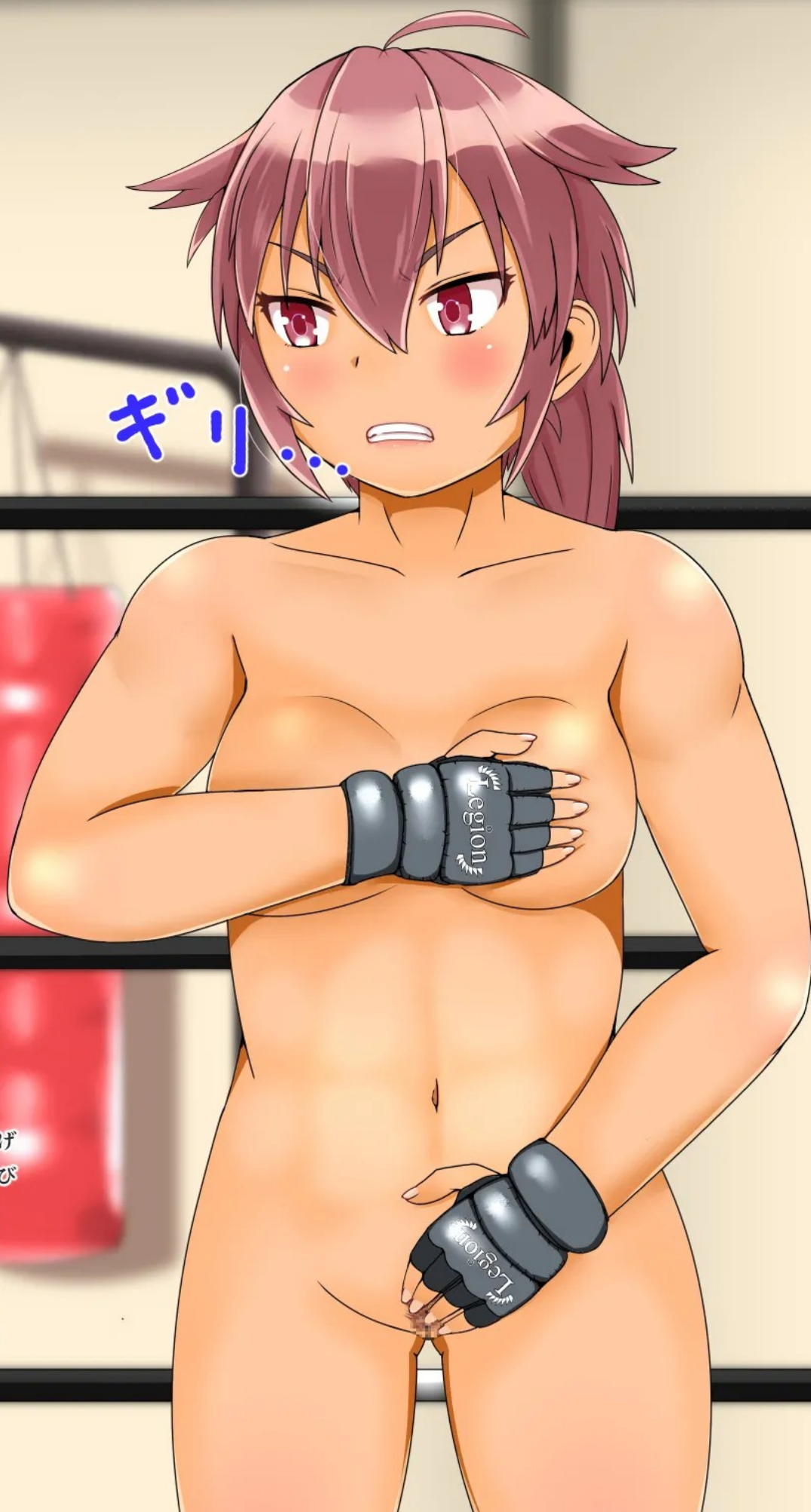




私は奴らの指示通り
グローブだけ付けて
リングに立った。

ギリ……

二人の男の下卑^げた視線が
私に注がれている……。



「お前手で隠してたら
スパーリングできねえ
だろ」
男の一人が嗤^{わら}う。

ギッ!!

もう一人の男はスマホを
こちらにむけながら、
ロープ際^{たす}でニヤけながら
佇^{たす}んでいた。



私は胸を隠していた腕を
だらりと下げた。

パリン♡

ス...

「結構いいおっぱいしてんなあ
脂肪付けすぎなんじゃねーか」
男が下品な言葉を投げ付ける。



秘所を隠していた腕も下げ、
裸体を奴らに晒した。
羞恥に唇を噛み締めて耐える
しかなかった。

カアア~

~~~~~

スー...

「はははっ、そんな毛深いもん晒して、  
恥ずかしくないのか？」

「二応女なんだから手入れくらいしろよな」  
奴らはただ嗤っていた。





奴らの目的が裸の私と  
スパーリングすることなら、  
さっさと終わらせよう。

ぷりん♡

ぷりん♡

!!  
!!  
!!

いつも通り、すぐソックアウト  
させてしまえば終わりだろう。





構わず攻め続けると、  
男の表情から余裕がなくなり、  
もう一人の男になにか合図していた。

ギョッ!!

オート

「いいぞ、丸見えだ！」  
スマホを持った男が  
はや  
囁し立てる。



もう一人の男がいきなり  
私を羽交い絞めにする。



「なっ、ちよっ…離して！」  
突然の出来事に、必死にもがいたが、  
しつかりと拘束されて動くことが  
できなかった。



突然男が私の頬を強く  
張った。

バ

ッ

ッ

ッ

ッ

「調子に乗るんじゃないよ！  
お前は一方的に  
やられていればいいんだよ！」





男の拳が腹部に捻じ込まれた。  
「おぶうっ!」  
私はくぐもった叫び声を挙げる。

おぶうっ!

「動けなきやお前なんてただの女なんだよ! わかったか!」  
男が叫ぶ。





「ぐ…このクソ野郎…」

私は苦痛に喘ぎながらも  
男を睨みつけた。

キュ

キュ

……

……

ガク

「なんだ、まだ元気じゃねえか。  
ちゃんと立場をわからせる必要が  
ありそうだな」

ガク

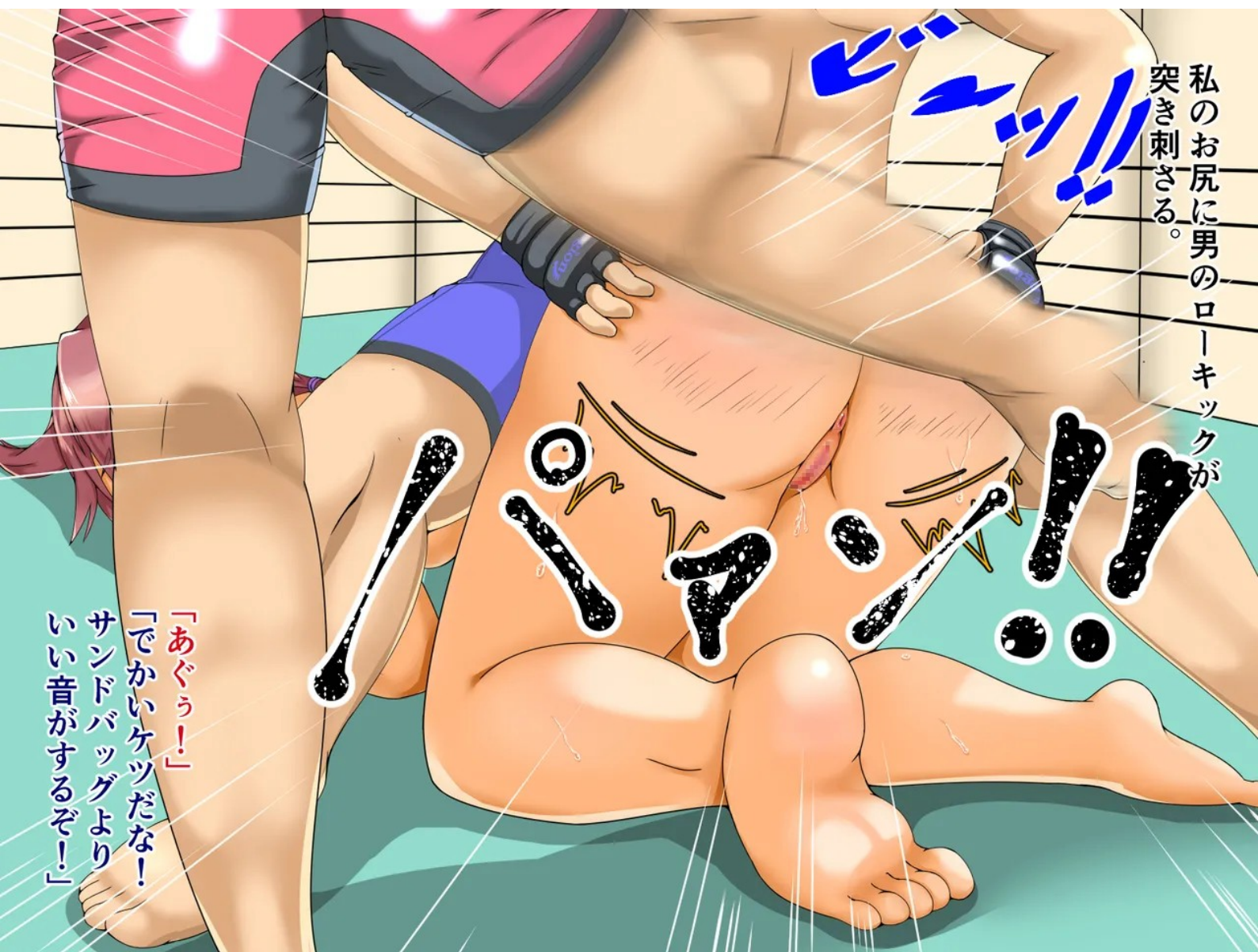




ゲゲゲ...

倒れ込んだ私の上に  
男がまたがつて、  
お尻をぐいと持ち上げる。

「おい、離すんじゃないぞ」  
もう一人が声を掛けた。



私のお尻に男のローキックが  
突き刺さる。

ベッ!!

アッ

バッ

バッ

「あぐう！」  
「でかいケツだな！」  
サンドバッグより  
いい音がするぞ！」



男は何度も私のお尻に  
ローキックを叩きつけた。

ひぐっ!!

「ひぐっ!!」  
押え付けられた私は、  
叫び声を上げるしかなかった。

バシッ! バシッ!



「もう…やめて…」  
「は？聞こえないんだけど」  
男はもう一度私のお尻を蹴る。



「もう、許してよ！」  
「だからそれがお願いする  
態度かって言ってるんだよ！」



執拗しつように続く男の蹴りに  
もう耐えることはできなかった。

「お願いします…もう許して下さい」



うー！  
びぐー！

「最初から素直にそういえば  
いいんだよ！」  
「俺らにちゃんと謝罪しろよな」

男の指示通り、  
コーナーポストで  
ロープに捕まりお尻を  
突き出した。

ギシ

ギシ

「いい格好だな。  
ケツが赤くてサルみたいだぞ」  
男達<sup>わら</sup>が嗤う。





「とりあえず  
サルらしくケツ振って  
謝罪しろや」  
「っ!？」



「す…すいません…でした」  
私はお尻を左右に振った。



「はははっ本当に  
やりやがったぜコイツ！」

私は悔しさと羞恥に  
打ち震えた。



男のゴツゴツした指が私の太ももをまさぐる。

「ひっ！」  
私は気色悪さで思わず声を上げた。

ひっ!!

さわ..

さわ..

「お前も欲求不満でイライラしてたんだろう？  
スツキリさせてやろうか？」



「なにを勝手なことを…」  
私が言いかけた時、  
男の指が私の秘所に挿入  
された。

ぬふっ♡

つふふふっ♡

「あぐう！痛い！抜いて！」  
「指ぐらいで大げさなんだよ。  
お前、処女なのか？」

クン!!!

ビ





男が乱暴に指を抜き差しする。  
「だから、痛いって！」  
私は怒気交じりの声を出す。

ビクッ! ビクッ!

「こんぐらいすぐに慣れるから、  
もっと根性だせよ」  
男は手の動きを緩めようとしなない。

にゅっ♡

にゅっ♡

にゅっ♡

にゅっ♡



今度は男の指が私の  
アナルにずぶずぶと  
差し込まれた。

ギュッ♡

ビクッ!!

ビクッ

「そ、そこはやめて!」  
「大丈夫だって、お前の汁で  
しっかり濡らしてあるからよ」





ゆっくりと指を抜き差しされ、  
苦しさの中に排泄するような  
快感が混じる。

ぬふふふ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

んほお  
んほお  
んほお

「んっ...んほお...」  
「なんだ、あんまり抵抗しないな」  
「お前はケツのほうが好きなんかな？」  
「そ、そんなワケないし...」



指が根元まで一気に挿入され、  
腸壁を擦るように指が動いた。

ぐぬっ

「ひっ! あああああ!」

体がガクガクと震えて、ついに  
支えられられなくなった。  
リングに滑り落ちた私に、  
男たちの喘い声が注がれた。

ドン

ドン



「はぁはぁ…」

私はマットに仰向けになり  
大きく呼吸した。  
体が小刻みに震え、動けなかった。

はぁ…

はぁ…

ぷる

ぷる

「まさか、ケツでイくとはなあ。

とんだ変態オシナだな」またが

そう言いながら私の上に跨る。

腕は別の男に押さえつけられていた。

男は性器を露出して私に見せつけた。  
初めて見るソレは、不気味に  
振り返っていた。

ぬっ!!

「なんだあ?」  
そんなにコイツが見たかったのか?」  
男に言われてハッとなり、目をそらす。





男は私のおっぱいを乱暴に握ると  
寄せて自分の性器を挟みこむ。

「意味わかんない、この変態！」  
「ケツでイクわ、ちん○ガン見るわ、  
お前の方がよっぽど変態じゃねーか」

むにっ♡

むにっ♡



男は性器をおっぱいに挟んだまま、  
腰を振り始めた。

くっ...

ぬゅっこ♡

ぬゅっこ♡

「おら、今の気分はどうだ？

ええ？」

私は悔しさに顔をしかめながらも  
何も言うことができなかった。





「ほら、出すぞ！  
しっかり顔で受けるよ」  
男の性器から勢いよく精液  
が飛び出した。

びちゃあ！！

ドビュッ！！

「きゃっ！うう…気持ち悪い…」

鼻を突く匂いが立ち込める。  
こんなヤツに顔や胸を  
汚されたことがショックだった。





男に頭を掴まれて膝立ちになると  
私の左右に性器を反り立たせた  
二人が立っていた。

ビキ

ビキ

ビキ

ビキ

「ひっ……！」

避けようとする私の頭が、  
強引に引き寄せられる。

ドキ

ドキ



私の口に男の性器が捻じ込まれる。

「歯を立てるなよ！言うこと聞かねーとわかってんだろうな」

ゲゲゲ...

ちゅっ♡

んぶっ!!

「ん...んぐっ...んぶっ！」

ひどい匂いが鼻に抜け、生臭くて吐き出しそうな味が口に広がる。



私の頭を無理矢理前後させて  
性器をしごかせる。

ゲン

クン

ぢゃっふ♡

ぢゃっふ♡

「んっ…んぶっ…！」  
「いいぞ！出してやるから  
しっかり口で受け止めろよ！」



男の性器がビクビクと脈打ち、  
口の中が精液であふれた。  
「んっ！うええ…はあはあ…」

はあ…

ピクッ

だう

はあ…

ピクッ

私の口から糸をひいて  
男の性器がだらんとぶらさがった。  
「いいザマだな、クソ女」



「次は俺の番だな、しっかり<sup>くわ</sup>啜えろよ」  
今度は別の男の性器が捻じ込まれる。  
私はもうされるがままだった。

グイッ

ちゅっ♡

あぶっ!!

「あぶ…っ、んむ…」

「だいぶ素直になってきたようだな」

まるでモノでも扱うように

男は私の口で性器をしごいている。



男の性器が引き抜かれると、  
勢いよく私の顔に射精した。  
「ハハハ、うまくいったぞ！」

ドブッ！！

ビュッ！！

ビュッ

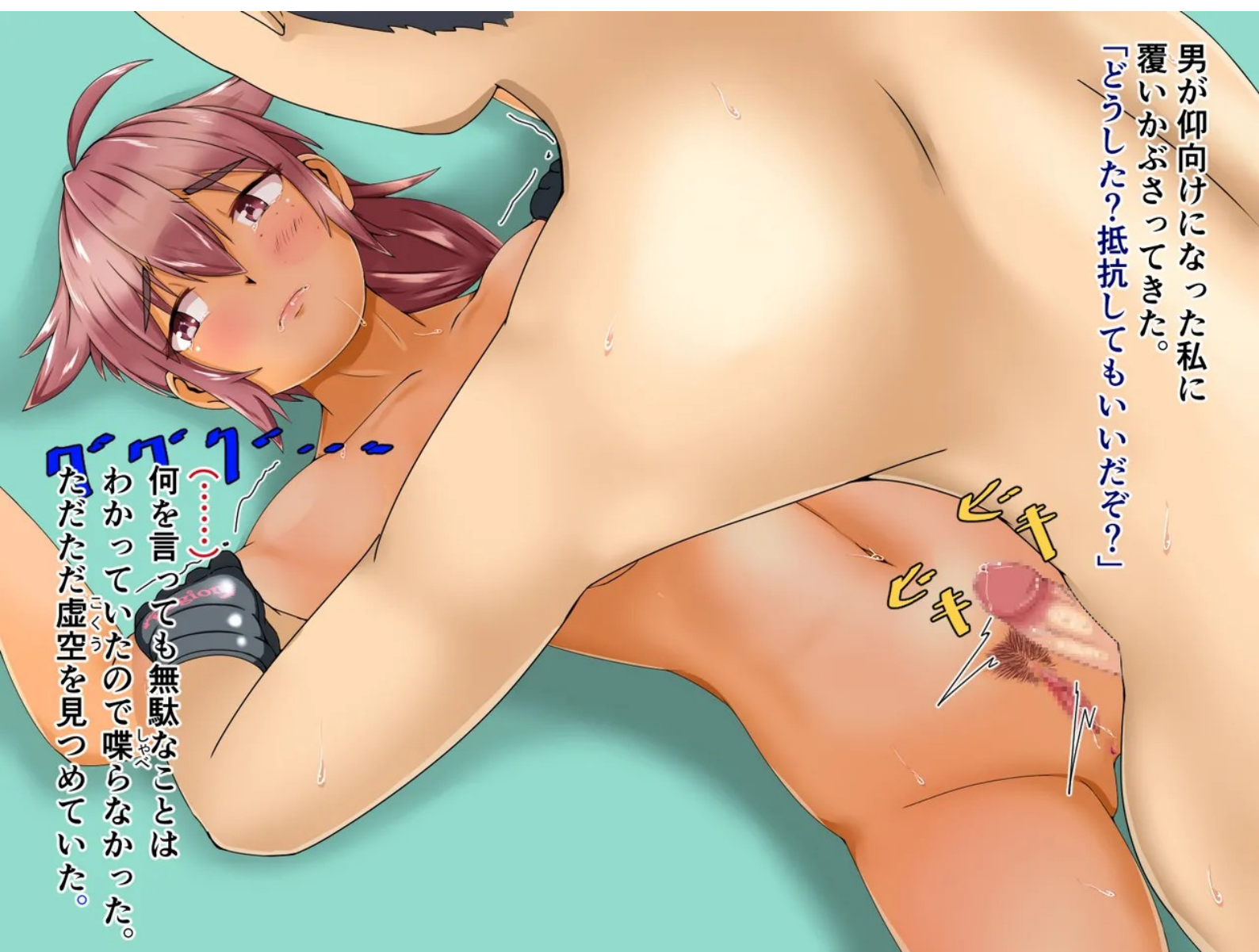
こんなオモチャのような扱いを受けても  
なにもできなかった。  
自慰行為を撮影されている以上、  
私は歯向かうことができない…。



男が仰向けになった私に  
覆いかぶさってきた。  
「どうした？抵抗してもいいだぞ？」

ガッガッ...

何を言っても無駄なことは  
わかっていたので喋らなかつた。  
ただただ虚空を見つめていた。





「まあいいんだけどよ、  
じゃあ挿入れさせてもらおうわ」  
男の性器が私の秘所に容赦なく  
挿入される。

ちゃぽぽぽー♡

「ぐっっ、ううっっ!!」  
私は必死に痛みに耐えた。  
初体験がこんな男なのが悔しくて  
たまらなかった。



「流石にキッツいわ  
どうだ？オレのチ○ポの味は？」  
腰を打ち付けながら喋っている。



「んっ……ぐっ……あぐっ……！」  
お腹をえぐられているような気持  
だった。  
それでも必死に声を押し殺した。



「まあいいや、お前のナカにだしても構わないってことだな」



「ぐっ…やめて…ふざけないで！」  
「おっやっやっぞ喋ったな、  
でもおせーからな」  
男のピストンが加速していく。



「オラ！出すぞ！  
しっかり子宮で受けるよ！」  
「やめてえ！嫌<sup>いや</sup>あああああ！」

ああ  
ああ  
ああ！！

びんっ

ジュウッ

びんっ

体の中で男の性器が脈打ち、  
熱い液体が放たれるのを  
感じた。



「うう…ひどいよお…」  
私の秘所からたらたら精液が  
滴り落ちていた。



「なに休んでんだ、俺は  
まだおわってねーぞ」  
今度はもう一人の男が  
私を抱きかかえた。

男は挿入したまま私を抱き上げた。  
お腹の中から突き上げられたような  
感触で、圧迫感で息が苦しい。

「あぐっ！は、離して！」  
「どうだ、ちん〇に串刺しにされる気分は？」  
「はあ…はあ…く、苦しい…」

ぢゅぷぷ  
ぷ





男は体全体を揺さぶるように上下させる。  
そのたびにお腹が突き上げられて、  
肺が潰れるように息苦しくなる。



「う…動かないで…息…できない…」  
「苦しいか？そりゃいいザマだな、  
散々コケにしてくれた罰だ！」  
さらに上下動は激しくなる。



気付くともう一人の男が背後に  
立っていた。  
お尻に性器を押し付けている。

「はあっ…何…もうやめて…」

私の懇願に耳を貸さず、恐ろしいことを  
言い出した。

「せっかくだからコッチの穴も使ってやるよ。」

「はははっ、いいぞ、ブチ込んでやれよ！」

ス…





「いい加減にしてよ！変態！」  
私は声を振り絞って抗議した。  
「まだまだ元気じゃねえか、  
力抜かねえと、いてえぞ」

ズブズブと私のアヌスに性器が  
挿入されていく。  
「やだやだやだ！痛い！痛いって！」  
「ほら、頑張れ、もうちよつとで全部入るぞ！」

ズブ  
ズブ





息苦しさと痛みと熱気で意識が薄らいでいく。  
「はっ…はあっ…痛いよお…許して…」  
私はうわごとのように呟いた。

「ガキみたいなこと言ってるんじゃないぞ！」  
男たちの容赦ないピストンがやむことなく  
続く…。





「らめ…もう…むり…」  
次第に舌が回らなくなっていく。

「それじゃあ出してやるからよ！」  
「しっかり受け止めるよクソ女！」





その瞬間、男たちの性器が私の体の  
中で脈打ち、精液が弾けるように発射された。  
痛みも薄らいで、その感触だけを  
私は感じていた。

「いやあ……もう出しちゃだめえ……」  
私自身も体をビクビクと震わせて呟いた。  
「おいおい、なんだ壊れちゃったか？」





私は潰れたカエルのように、  
マットに転がされた。  
前後の穴から精液がだらりと垂れていた。

男たちが何やら話していたが、  
もうどうでもよかった。  
ただ、視界の端に映ったモノが、  
なにやら私にとって重要な事の気がした。  
なんだろう…なんだっけ…





